

田舎暮らしを楽しむ

(6)

佐藤 彰啓



「移住して故郷が近くなった」と話す実藤さん夫妻
(栃木県那須町)

田舎暮らしの場所の選び方として、都会から比較的近いところにするか、遠隔地にするか、二つのパターンがあると紹介した。こうした都会からの物理的な距離のほかに、自分の生まれ故郷に帰るかどうかを軸にした選択方法もある。俗にUターン、Iターン、Jターンと呼ばれるスタイルだ。Uターンは、生まれ故郷に戻ることで、中高年の田舎暮らしでは意外に少ない。濃密な人間関係を敬遠するからだろう。小学校の恩師から、「君は子どものころ、鼻たれ小僧でね…」など

Jターンで故郷に近づく

地域選び(下)

と言われては、たまらない。出身地でない「新天地」に移り住むことをIターンという。田舎暮らしではこのパターンが最も多い。自分の生まれ育ったところより、知らない土地の方がしがらみがなく、ほどよい距離を保ちながら地元の人々と交流できるメリットがある。Jターンは、Uターンのように故郷には帰らないが、居住地と故郷の中間に移り住むというもの。いわば「途中下車」である。

東京都練馬区の実藤正義さん(60)、和子さん(55)夫妻が栃木県那須町に居を構えたのは、その例である。和子さんは秋田県大曲市(現・大仙市)の出身。里帰りのたびに、那須を通り過ぎてきた。その親しみもあり、初めて那須の土地を見たとき、故郷に似た田園風景が広がっていて、心安らぐものを感じた。

セカンドハウスとして六年前に購入したこの家には、和子さんの両親も秋田からやって来る。雑踏の東京まで行くより、ここがいいという。今年三月、正義さんの定年を機に定住に踏み切った。那須から新幹線を使うと秋田まで約三時間。年老いた親の暮らすふるさとが近くなり、これからは気軽に出かけられるという。

Jターンを選ぶ人には、故郷に帰るのに抵抗はあるものの、どこかで故郷とつながっていたいという気持ちもあるようだ。両親が病気になったとき、見舞いや介護に行きやすいし、いざという時にも、すぐに駆けつけられる安心感がある。

(ふるさと情報館代表)